



Young Ophthalmologists Committee Hot Topics !



Instagram

行ってみよう！ 海外学会紹介 ①

日本眼科学会戦略企画会議第二委員会
Young Ophthalmologists Committee

読者の皆様は、どのような海外学会に参加されたことがありますでしょうか。「専門外の海外学会について、情報を得る機会が少なく、参加へのハードルが高いのではないかな」—そんなYOC委員の気づきから、委員が実際に足を運んで「行ってよかった」と感じた海外学会の体験談を募集しました。2回連続シリーズの初回となる今回は、緑内障、網膜、角膜の各専門学会、そしてAmerican Academy of Ophthalmology Annual Meeting(AAO)についてご紹介します。皆様の次の挑戦先を、ぜひ本コラムで見つけてください。

International Society for Eye Research (ISER)/BrightFocus Foundation Glaucoma Symposium(清田直樹先生)

本シンポジウムは、眼の基礎研究・橋渡し研究のコミュニティであるISERの中でも、緑内障に特化した国際会議で、数年ごとに開かれます。Experimental Eye Research誌がISERの公式誌であると説明すると、研究者には本シンポジウムの位置づけが伝わりやすいかもしれません。

2025年はアトランタで開催され、講演から食事まですべてが一つのホテル内で行われました。清田先生は、参加者同士の距離が近く、食事や休憩の時間にも自然に議論が続く、集中型ワークショップに近い雰囲気だったと振り返られています。

若手向けのGlaucoma Fast Trackでは、緑内障の定義から始まり、緑内障研究の基礎を短期間で俯瞰できます。研究内容に加えて、プレゼンテーションや交流の方法を学ぶ機会もあり、その点が特に印象に残ったとのこと。Travel Awardもあり、清田先生が参加された年は交通費の補助ではなく、参加費・宿泊費・食費を含む費用をいったん支払い、会期後に払い戻される形式だったそうです。他の参加者との相部屋が割り当てられ、一人部屋を希望する場合の追加料金は自己負担です。

清田先生の印象では、眼圧・房水流出路関連の発表が約3割、網膜神経節細胞や視神経関連も3割程度だっ

たそうです。画像解析・人工知能(AI)、ゲノム解析などが残りを占めており、緑内障研究を多方向から捉えることができます。日本が強みを持つレーザースペックルフローグラフィ(LSFG)やヒト人工多能性幹細胞(iPS細胞)研究の発表もあり、日本人研究者による発表にも自然に関心を持ってもらえる学会だと感じられたようです。

Association for Research in Vision and Ophthalmology(ARVO)の会場に設けられるISERブースも情報収集の入り口になります。清田先生は、小規模ながら緑内障研究を横断的かつ深く学べる点を本シンポジウムの魅力に挙げ、若手研究者にも参加を勧められています。公式サイトには集合写真なども公開されていますので、興味のある方はぜひ学会の雰囲気をご確認ください。

Retina Society(下川桜子先生)

Retina Societyは、世界の網膜研究・治療を牽引するトップクラスの学会です。「近代網膜治療の父」Charles Schepens先生によりボストンで設立され、限られた会員制のもと、最先端の研究と臨床知見が共有されます。

下川先生によりますと、Retina Societyの特徴は、基礎研究から臨床試験まで「これから世界標準になる治療」をいち早く知ることができる点にあります。先生が参加された2025年も、網膜色素変性や加齢黄斑変性に対する遺伝子治療、幹細胞治療、オプトジェネティクス、Gene-agnostic therapy、AI解析など、未来の眼科医療を変える発表が多数紹介されました。特に米国ではClinical Trialが非常に活発で、世界中の研究者・臨床医が熱く議論を交わしていたとのこと。

さらに、連日の華やかな社交行事を通して、著名なretina specialistと直接交流できることも本学会の大きな魅力とのことでした(写真1)。Lawrence Yannuzzi先生とお話しする機会にも恵まれ、特に印象に残っているそうです(写真2)。

会員(写真3)になるためのアドバイスは、2025年



写真1 フィールド自然史博物館での Social Event にて、第一線で活躍されている日本の先生方との記念撮影。



写真2 Gala Party で、会長の Jennifer Lim 先生より、Lawrence Yannuzzi 先生を紹介いただいた際の様子。



写真3 本会で晴れて会員になられた村上祐介先生、下川先生を学会に招待された Mukai Shizuo 先生との記念の1枚、下川先生は Poster Award を受賞。



写真4 Wills Eye Hospital の Yoshi 先生(左から3番目)はみんなの人気者。

10月24日公開の JRVs Times 公式 Facebook 記事「Retina Society Meeting に若手医師と共に参加して」の村上祐介先生のコメントが参考になります。一方、若手の先生に向けては、まずは上司の先生とともに参加してみることを下川先生は推奨されています。次回は、カリフォルニア州ロサンゼルスで開催予定です！

■ Fujiretina(下川桜子先生)

Fujiretinaに参加されたことはありますか？ Fujiretinaは、国内で定期開催される貴重な眼科国際学会です。鹿児島大学前教授の坂本泰二先生が創立され、

毎年3月に虎ノ門ヒルズで開催されます。毎年、世界中から第一線の研究者・臨床医が多数参加し、稀な症例の報告や最新の臨床／基礎研究、手術手技に関するホットなディスカッションがテンポよく展開されます(写真4)。

下川先生によりますと、すべて英語で進行することもあり、他では味わえない緊張感と高揚感が体験できるとのことです(写真5)。海外からゲストを迎えるパーティー(写真6)や景勝地への小旅行を通じたコミュニケーションもこの学会ならではの、思いがけず同世代のレチナサージャンとつながりが生まれたことも嬉しい収穫だったそうです。次回は2027年3月26日から28日に開催予定です。ぜひご参加ください。

■ AAO/Cornea and Eye Banking Forum 2025 (渡辺真子先生)

AAOは世界最大規模の眼科関連学会の一つであり、網膜、白内障、屈折矯正、緑内障、角膜、ぶどう膜、小児眼科、神経眼科、眼形成、眼腫瘍・病理など、ほ



写真 5 英語でも発表を楽しむ鈴木文那先生と船津 諒先生。



写真 6 坂本泰二先生と海外ゲストで鏡開き！

ばすべてのサブスペシャリティに関するセッションが用意され、最新知見を一度に学ぶことができます。プログラムも多彩で、instruction course, skills transfer lab, paper, poster, video, symposium, Sub-specialty Day など、教育的内容から最先端の臨床研究までを網羅しています。渡辺先生は2025年にフロリダ州オーランドで開催された Annual Meeting(写真7)、および同期間に Cornea and Eye Banking Forum にも参加されました(写真8)。

Cornea and Eye Banking Forumは、Cornea Societyと Eye Bank Association of America (EBAA) により主催され、角膜およびアイバンク領域に特化しています。AAO開幕前日に開催される関連学会として位置づけられ、2025年はAAOと同じオーランドで

開催されました。角膜疾患、角膜移植、アイバンク、ドナー角膜の保存・評価、角膜再生医療などに関する最新の知見が集中的に議論されたとのこと。

AAOの角膜のシンポジウムでは、京都府立医科大学の木下 茂先生による培養ヒト角膜内皮細胞注入療法およびRhoキナーゼ(ROCK)阻害剤の角膜内皮細胞に対する効果についての講演が非常に高い関心を集めており、渡辺先生も特に印象に残ったそうです。その他にも、磁気を利用した異なる機序による角膜内皮細胞注入療法、人工角膜治療の歴史的変遷、角膜混濁に対する新規治療薬としてのLosartan(アンジオテンシンⅡ受容体阻害薬)の有効性など、興味深い報告が多く発表・議論され、角膜治療の歴史から、細胞治療、薬物治療、人工角膜、再生医療を含んだ最新のトピックま

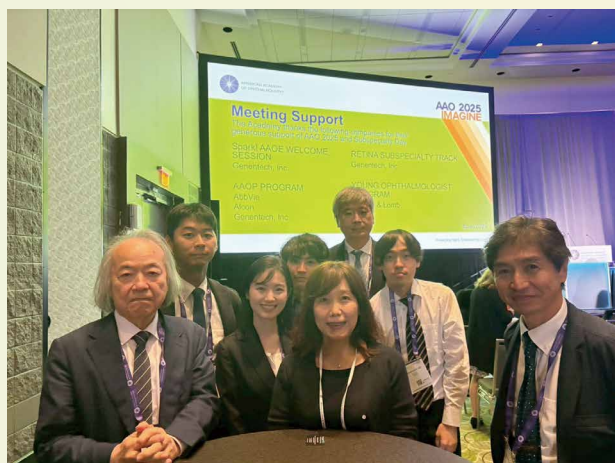


写真 7 AAO にて記念撮影。



写真 8 Cornea and Eye Banking Forum 2025.

で幅広く学ぶ機会となったとのことでした。

また、国立長寿医療研究センターの大久保寛先生とともに、現在 Bascom Palmer Eye Institute に留学中の富岡靖史先生とそのラボメンバーの方々とも学会の合間に交流されたそうです。そうした交流を通じて、留学経験やアメリカの眼科医療システムについて貴重なお話を聞き、視野が広がることも、海外学会ならではの機会として挙げられました。

■ 終わりに

初回は3人の先生方の学会経験を紹介いたしました。本コラムをきっかけに、まずは一緒に行く仲間を見つけてみるのはいかがでしょうか？ 新しい学会へ飛び込んでみることで、さらなる出会いやアイデアが見つかるかもしれません。次回も引き続き、魅力的な海外学会の情報をお届けします。本コラムが、YOCの理念である若手医師の垣根を越えた交流や発展、そして国際化へ踏み出すきっかけとなれば幸いです。

(文責：佐渡恵奈)